

アジア研究教育ユニット（世界展開力・特別経費）平成 27 年度教育研究報告書

事業課題名	非常勤講師任用
代表者名	片岡樹（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授）
事業概要 (600 字程度)	<p>フィールドワークと現地資料の読解を基礎とするアジア地域研究のためには、現地語学の正確な読解・自由な運用が必須である。本事業は、フィールドワークと現地資料の読解にもとづいた独創的な研究を志す次世代のアジア地域研究者のために、現地語習得のための講義を開講し、その能力向上をめざすものである。具体的には、東南アジア地域研究における主要言語のひとつであるビルマ語を対象に、これらの言語の運用能力を向上させる講義を開講する。内容としては、初級文法・初級会話と簡単なビルマ文字の読解を講じ、ビルマ語の基礎力を涵養する。</p>
成果の概要 (800 字程度)	<p>平成 27 年度は、本事業の経費によって、前期に「ビルマ語 I（初級）」、後期に「ビルマ語 II（初級）」の講義を開講した。いずれも日本学術振興会特別研究員（PD）の小島敬裕氏を雇用し、これらの講義を実施した。</p> <p>ビルマ語は、タイ語、マレー（インドネシア語）、ベトナム語とならぶ東南アジアの主要言語のひとつであり、ミャンマーの国語ともなっている。長い文化的伝統を有するミャンマー地域を研究するうえで極めて重要であり、欧米研究者によって書かれた英語文献のみに依存した皮相な研究にとどまることなく、自身のフィールドワークを踏まえた東南アジア地域研究を形成していくうえで、現地語運用能力はきわめて重要となる。にもかかわらず、ミャンマー国家がつい近年まで鎖国に近い国家体制をとってきたことによりビルマ語学習環境の整備は他の東南アジア言語に比べ大きく立ち後れており、しかもミャンマーにおける急速な開放体制への転換はビルマ語学習者の潜在的ニーズを爆発的に拡大しているため、需要に供給が追いつけない状況が生じている。</p> <p>したがって、講義においては、初歩的な文法の解説や会話能力の訓練を重点的に実施した。その成果として、受講者の大学院生たちは、ビルマ語の初級会話能力を身につけ、受講者の一部はさらに進んで自身のフィールドワークで積極的にビルマ語を使いこなすまでに至っている。このことは、教室語学を超えた、研究に直結する語学力をもった次世代研究者の育成に本事業がきわめて大きな意義を持っていることを如実に表している。また、各講義とも、代表者の所属する研究科だけでなく、学内の様々な研究科の大学院生が履修し、全学的にも本事業の効果はきわめて大きかったと思われる。</p>